

拓殖大学外国語学部 創設期から 20 周年まで

安富 雄平

拓殖大学外国語学部は 1977 年に英米語学科、中国語学科、スペイン語学科の 3 学科をもって創設された。

拓殖大学は 1900 年の創立以来、国内はもとより、広く海外で活躍する有為の青年を輩出し、わが国と世界の発展に貢献してきた。とりわけ、経営や金融の知識、法律や経済の知識を持つだけでなく、外国語の知識と運用力とを合わせ持った学生を育成することが大きな特色であった。

瓜谷良平「拓殖大学と語学」（『海外事情』1973 年 4 月号）によると創立当時の授業時間の配分表には、簿記や経済学、統計学、商法、民法などとならんで、英語、台湾語、清国語の名が挙げられている。これら外国語の授業時間数は第一学年で週 18 時間、第二学年で週 17 時間と多く、「時間数からみても拓殖大学は今日でいえば外国語大学の性格をもって創設されたと言ってよいであろう」と瓜谷は指摘する。

1960 年代後半からアジアからの留学生が多く拓殖大学に学ぶようになると、当時すでに第二外国語として設けられていた中国語、朝鮮語、インドネシア語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語、アラビア語、パキスタン語などに、留学生のための日本語が加えられ、学内でも日本語教育への関心が高まった。

1970 年代に入ると、いわゆる実用外国語としての訓練・教育に加えて、言語に関する科学的な研究と教育の必要性が次第に意識されるようになった。それに伴い、本学で外国語を学ぶ学生には是非とも音声学や統語論、意味論、語史など言語学の基礎を学ばせたいと考える教員側の認識も生まれた。1973 年 4 月から商学部貿易学科外国語コースの中に「英語学」が設けられたのは、このような事情を背景とするものであった。

現代社会では官民を問わず、言語を専門に勉強した語学エキスパートが必要とされるようになっており、英語・フランス語・ドイツ語および、それ以外の「特殊語学」と呼ばれていた諸外国語を勉強した学生に対する求人は、東京外国語大学と並んで本学にも多くの要請があった。

一方、1960 年代には、札幌大学、東京外国語大学、上智大学、麗澤大学、神奈川大学、獨協大学、南山大学、愛知県立大学、関西外国語大学、京都外国語大学、京都産業大学、

大阪外国語大学（現・大阪大学外国語学部）、神戸市外国語大学、北九州外国語大学（現・北九州市立大学）、長崎外国語短期大学（現・長崎外国語大学）など、すでに多くの大学に外国語学部が設置されていた。

このような社会情勢の中で、外国語の運用に習熟し、且つ、外国語学の専門知識をも併せ持った人材養成のための学部を開設しようとする機運が高まったのは、本学が創立以来外国語教育を特色の第一としてきたことを考えると、至極当然のことである。

1959年に制定された「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」によって、都心部での大学の教室の新設・増設が制限されるようになると、文部省（現・文部科学省）は都心に本部を置く大学に対し、学部や学科の新規開設を認可しない方針をとった。このような文部省の抑制方針を受けて、多くの大学が郊外に移転してゆとりのある校地を確保しようとするようになった。本学も1977年、八王子市館町に八王子校舎を開校、商学部と政経学部の一年次と二年次を移転するとともに、英米語学科（定員100）、中国語学科（定員50）、スペイン語学科（定員50）の三学科からなる外国語学部を開設した。

外国語学部の第一回入学式は、1977年4月9日（土）に八王子校舎の体育館で行われ、明けて11日（月）から3日間のガイダンス、オリエンテーションを経て前期授業が開始された。当時の資料によれば、1977年度の学年歴は以下のように続く。4/27・5/7履修届提出、7/5前期授業終了、7/7～7/19前期試験、7/20～9/15夏季休暇。後期は9/16に授業開始、12/14に年内の授業終了、その後12/15～12/17に卒業試験というものがあったようだ。勿論この年は外国語学部は一年次生のみなので、これは商学部・政経学部の学生が対象である。そして、12/19～1/7冬季休暇、1/8は日曜日で、明けて1/9授業開始、1/27後期授業終了、1/30～2/10後期試験とある。30年前は年が明けても2週間と少しの間授業があったのである。

外国語学部開設初期の入学試験は茗荷谷校舎で行われ、在籍学生は必ずしも定員に達していなかったが、全学を挙げて外国語学部を拓殖大学の看板学部にするのだという意気込みが感じられた。第一期生は英米語学科59名、中国語学科31名、スペイン語学科31名（男子62名、女子59名、計121名）であった。

新しく開設された八王子校地には5階建ての事務・教室棟であるA館と、講義用大教室のある平屋のB館、および二階建



1979年の八王子キャンパス。A館増築部分はあるが、管理研究棟や図書館棟はまだ無い。【国土画像情報（カラー空中写真）、国土交通省】

でのC館に加え、体育館、プール（屋外）、扶桑寮、国際交流会館がおよそ105ヘクタールの広大な敷地の北側に集中して建てられていた。A館の増築と管理研究棟、図書館棟、工学部棟などの建設は後年のことである。

A館の一階には教員控え室や、学生生活課、学務課、管財課がオープンスペースに並ぶ広い事務部門、および学生ホールなどが配置されてあった。現在、東側の窓にロの字型のブロックを積み重ねた装飾が残っているA館2階の部分が図書館で、学生ホール右側の階段から二階に上がると入り口があった。北側（右側）が貸し出しカウンターと開架書庫、南側（左側）が閲覧室、新聞閲覧室、コピー室などで、学生食堂（現第一学生食堂）との境目は締切になっていた。

3階には二つのLL教室と視聴覚教室、LL準備室、タイプ室、理科実験室、電算課とコンピュータ教室、語学研究所分室などがあった。教員の研究室もA館にあり、4階の北側の部分2ブロックの廊下を挟んだ両側に二人一部屋の研究室が並んでいた。

A館の裏手の、今は清掃関係の控え室になっているプレハブは麺類食堂と理髪店で、その横に購買部のプレハブもあった。

八王子校舎開設三年目から路線バスが本学と高尾駅南口との間に運行されるようになり、またこの年から新生には豊かな自然環境に配慮して、破傷風の予防接種が実施された。当時紅葉台住宅地内の道路は私道であった（後に八王子市に移管）ため、国際交流会館前から現在の北門に至る道路は通行止めになっていた。徒歩による通学路は大学正門を出て旧町田街道を左方向に進み、坂を下る途中で斜め左に分岐する農道（山道）に入り、紅葉台のはずれから廣井医院下の狭間町住宅地の中を抜けて高楽寺の前を通り初沢町、高尾駅に至る経路であった。しかし、丸太を組み合わせた車止めや有刺鉄線の隙間をかいくぐって現在の北門あたりから近道をする学生も多く見られた。



昔の麺類食堂と「たくとこ」。今は清掃業者の皆さんの控え室になっている

『学友名簿昭和 61 年版』（拓殖大学学友会）によると、外国語学部第一期卒業生（第七十九期，1981 年卒業）は英米語学科 69 名，中国語学科 23 名，スペイン語学科 22 名，計 114 名であった。以下数字は英米語学科，中国語学科，スペイン語学科，合計の順で，第二期（第八十期）は 57，36，18，計 111 名，第三期（第八十一期）は 84，41，26，計 151 名，第四期（第八十二期）は 78，41，32，計 151 名である。

外国語学部では学部開設に当たって既に学生の海外留学を制度的に整える必要性を認識していた。初代学部長の瓜谷良平は当時の物価上昇率や為替レート，渡航費用などが学生をして留学を可能とならしむる状況にあることを捉えて，外国語学部の学生は当該外国語が話されている国に留学すべきだとの見解を示していた。特に初習語学である中国語やスペイン語の学生は学習開始後早い時期に，できれば全員を留学させたいと考えていたが，これは後に短期語学研修として実現することになる（中国語学科は 1989 年，スペイン語学科は 1990 年より開始）。

1979 年には長期留学制度が設けられるが，当初は相手方の大学や教育機関を「海外分校」と呼んでいた。最初のカナダ分校（Vancouver Community College/カナダ）に続いて，1981 年には中国分校（北方工業大学/北京）と台湾分校（東呉大学/台北）および，スペイン分校（Universidad de Salamanca/スペイン）とメキシコ分校（Universidad Nacional Autónoma de México/メキシコ）が開設された。これらの分校は外国語学部の学生のみならず，商学部や政経学部の学生も留学することができ，外国語科目（商学部・政経学部の英語や，第二外国語としての中国語，スペイン語）を履修した学生が多数留学して大きな成果を挙げている。

因みにスペイン語関係では 1979 年の春季休暇中に政経学部の宮本博司先生を同行講師とする短期スペイン研修が催行され，スペイン語学科の一年生 2 名と，商学部の二年生 1 名が他学の学生ら 3 名とともにマドリッドにホームステイし Instituto VOX で勉強した。また，スペイン分校が開設される前年度の 1979 年 10 月から 1980 年 7 月にかけて，スペイン政府奨学生として，スペイン語学科の 2 年生 1 名と 3 年生 5 名がサラマンカ大学に留学し，Estudios Hispánicos というスペイン語圏の外国人に向けたコースで学んだ。これが事実上，スペイン長期留学の 1 回目である。

1980 年 4 月の新入生入学をもって完成年度を迎えた外国語学部は次表に示す教授陣をもって研究と教育にあたった。年度末の 1981 年 3 月には第一期卒業生 114 名を送り出し，また，英文学の鈴木四郎教授，中国語の土屋申一教授，植物学の稲垣貫一教授，鉱物学の遠藤六郎教授が退かれた。翌年度からは英米語学科には島 茂彦先生を，また教養教育科目担当の脇岡義人先生（科学史）と門馬栄治先生（生物学）を迎え，齋藤繁司学部長の下，創設期から基礎確立期に向けて着実な歩をしるすことになる。

表 1980 年度外国語学部担当教員

	教 授	助 教 授	専任講師	兼任・非常勤講師
英米語学科	鈴木 四郎 鈴木 進 丹 薫	森 哲夫 茂住 實男 本吉 侃 志方 紀子 松本 幹男	R.G.ウイル D.C.プリヴェット	広田 文男 (商学部) 友部 隆教 (政経学部) 清水あつ子 相原 仁郎 山川喜久男 滝沢 熊男 J. 和田 D. アラン C.A. レイ
中国語学科	竹島 金吾 土屋 申一 欧陽 可亮	薛 国棟 亀谷 隆行 劉 文献	佐藤 博 早瀬 武俊	和田 武司
スペイン語学科	瓜谷 良平 宮城 昇 長南 実	浦和 幹男 J.J. ナバーロ J.M. ベナビデス	飯野昭夫	宮本 博司 (政経学部) 高橋 道樹 (政経学部) 原 信之介 橋本 一郎 野谷 文昭 牛島 信明 J. フェルナンデス 清水マヌエラ 筋間ルーツ
語学・教養教育科目等担当	稲垣 貫一 (植物学) 遠藤 六郎 (鉱物学) 田島 修 (化学) 杉本 功介 (体育学) 高橋 芳郎 (日本史) 齋藤 繁司 (フランス語) 松丸 啓子 (ドイツ語) 宇川 勝美 (教育学)	荒木 雅實 (国語学) 千原大五郎 (美術史) 増田 米男 (心理学)	片山 克行 (法学)	和久井正一 (日本語教育・商学部) 新山 茂樹 (国語学)

1980年代は応援団の事件（1978年5月）や空手部の事件（1986年7月）などの影響で、拓殖大学といえば怖い大学であるというイメージがついてまわったが、昨今の他大学における不祥事の処理とは一線を画す厳しい処分と、教職員が一丸となって丁寧な教育と学生の立場に立った指導とを行ったことによって徐々に信用を回復するに至った。きめ細かな学生指導をとの考えから、1980年度より一年次必修として設けられた創造労作ゼミナールによる原初労働体験と教職員・学生間的人間的ふれあいによる人間形成のための德育には、学生らもよく応え、期待通りの成果を挙げた。

大学の授業は個々の教員の裁量に任されている部分が多い。学部開設当初、綿密に計画されたカリキュラムも、担当教員の入れ替わりと、教材や教授法の進化に伴って授業間、科目間の連携がとりにくくなり、全体として非効率化せざるを得なかった。1987年度に

は、外国語学部カリキュラム検討委員会が設けられ、学部開設以来初めて本格的なカリキュラムの検討が行われた。この結果、1991年度入学生より全学科で「人文コース」、「国際コース」というコース制を採用し、学生の志向に合わせて履修すべき科目が分かりやすいように配慮するとともに、必修および選択科目の見直しと科目名の変更とを行った。

このカリキュラム改訂によって、必修科目と選択科目ならびに教養教育科目の位置づけが再確認され、外国語学部は充実期に向けて更なる発展を遂げることになる。

分校制度による長期留学の制度は1979年以來着実に成果を挙げていたが、学部開設以来の念願であった全員参加型短期語学研修は、1980年代の後半に実施機運が高まった。1989年度の中国語学科の南京大学（中国）研修を皮切りに、1990年度にはスペイン語学科がグラナダ大学（Universidad de Granada スペイン）研修（湾岸戦争で催行中止、1991年8月に順延）を、1993年度には英米語学科がニュー サウス ウェールズ大学（The University of New South Wales オーストラリア）研修を開始した。さらに英米語学科は1994年度にエクセター大学（The University of Exeter イギリス）研修を、また1997年度にセントマーク アンド セントジョン大学（The University College of St. Mark and St. John イギリス）研修を開始、多くの学生に異文化体験を通してそれぞれの言語の学習意欲を高めさせ、帰国後の大学生活をより有意義で充実したものとした。

1990年代に入ると、もう一つの懸案であった大学院の開設に向けての動きが慌しくなり、それに伴う学部長の業務が激化することが予想されたため、1995年度から学部長の業務を補佐し、学科の意見をまとめるために学科長の職が設けられた。これは学部長の推薦によって総長が任命するものである。また、本学では慣例として教授会の議長は学部長が務めることとなっていたが、1997年度からは教授会の司会を三学科長が交代で行うことになる。



学生の質問に答えるベナビデス先生。第一回スペイン語短期語学研修（グラナダ大学）は夏に行われた。

大学院設置の構想は学部開設当時から無かったわけではないが、「外国語学研究科」では既存の他大学の大学院と競合し、また修了者の進路確保の問題もあったため実現にはいたらなかった。しかし、当時の外国語学部は日本語学科新設をも視野に入れた教員拡充策をとっていたため、優れた国語学、日本語学の教員を擁していた。そこで「言語教育研究科」大学院を開設しようという構想が俄かに現実性を持ち始めたのである。

1997年、外国語学部は創設20周年という節目を迎えると同時に、英語教育学専攻および日本語教育学専攻からなる大学院言語教育研究科修士課程（現博士前期課程）を設置した。英米語学科を母体とする英語教育学専攻には都留文科大学から若林俊輔教授を専攻主任に迎えるとともに、本学部英米語学科教員に加えて、商学部より名和雄次郎教授と小池定謨教授を、国際基督教大学から小林栄智教授を、エクセター大学からピーター・シャープ教授を迎え研究・指導体制を整えた。また、日本語教師養成講座等を母体とする日本語教育学専攻は専攻主任の川瀬生郎教授のもと、新たに横浜国立大学から迎えた鈴木重幸教授を加え日本語教育研究者と高度な知識を備えた専門的教育者の育成に乗り出した。また、二専攻対象の言語学担当として、東京外国語大学から原誠教授が着任した。

このようにして、拓殖大学外国語学部は1977年からの創設期、1980年代の充実期、1990年代の安定期を経て、更なる発展と躍進の10年へ歩を進めることになるのである。

（やすとみ ゆうへい・スペイン語学科教授）



八王子キャンパスの早春。